

2025年4月15日(火)～6月29日(日)

※前期4月15日(火)～5月18日(日) 後期5月20日(火)～6月29日(日)

公益財団法人 大倉文化財団 大倉集古館

室町時代14世紀に大和猿楽の観阿弥・世阿弥親子によって大成された「能楽」は、その後、幕府や諸大名の保護のもと、江戸時代に至って「武家の式楽」としての地位を確立しました。式楽であるがゆえに、その内容は格調高く幽玄であると同時に、そこで使われる能装束は雅で華麗な趣を湛え、見る者の目を楽しませてくれます。当館では、因州（鳥取藩）池田家伝来の能面と備前（岡山藩）池田家伝来の能装束を多数所蔵していると同時に、有馬伯爵家旧蔵といわれる狂言面もコレクションに含まれております。今までにも能面・能装束に重点が置かれた展覧会が多く開催されてきましたが、この度は、狂言にやや焦点をあてた展示となっています。能・狂言の演目を描いた絵画資料や能道具などの当館所蔵の作品を中心に展示致します。

\*註1：展示期間の記載のないものは通期展示 \*註2：図18・19以外はすべて当館所蔵品

## 1章 幽玄の美—能

室町時代14世紀に成立した能は、面と、華やかで美しい装束を着装し、専用の能舞台で謡（セリフと歌）と囃子（楽器）とともに上演される歌舞劇です。内容は人間の哀しみや怒り、懐旧や恋慕の情などを描いた、悲劇が多いです。そして「武家の式楽」として格調高く幽玄な舞に用いられるその装束類は、色鮮やかで上質な絹糸を潤沢に用い、高度な技術で制作され、豪華な趣をたたえています。当館が所蔵する能装束は、備前岡山藩主池田家の売立時に大倉喜八郎が購入し、当館に寄贈したものです。現在、林原美術館所蔵の能装束コレクションと合わせることで、備前池田家旧蔵の能装束の内容をうかがうことができる点で大変、貴重なものです。

### ◆厚板 あついた

厚板は男役の着付（帯を締めて着る法）に用いられ、多くは大口や絆切りなどの袴を着け、法被や狩衣などと併用されます。厚板というのは、厚板織という技法が装束の名称になったものです。厚板織とは緯糸に様々な色糸を縫い取り風に織り込んで模様を表し、これを経糸でとめた硬質な織物です。しかし能装束の場合は、必ずしもこの厚板織の技法によらずとも、模様が幾何学的な強い調子のものや、絵模様でも図柄が男性的な厳めしさを表した装束も厚板と称します。



図1 茶白萌黄段柳花菱模様厚板 江戸時代18世紀



図3 紅白段業平菱菊模様唐織 江戸時代18世紀

「紅入」の装束で、若い女性の初々しい華やきが伝わってきます。

### ◆唐織 からおり

唐織は女役の上着に着用されるもので、能の世界を象徴するような豪華な雰囲気を出す装束のことです。名称は厚板と同様、織物の技法に由来し、経糸に地織の緯糸を織り込んだ間に様々な色糸を縫い取り風に織り込み、その糸を浮かび上がらせてあたかも刺繍のような効果を示します（浮織）。平安時代以降、わが国で作られていた有職風な二倍織物から発達した形とみられ、「唐」という言葉は文様の糸を浮かせた浮文の綾を「唐綾」と称すことに由来すると考えられます。若い女性役は紅色の入った「紅入」を、中年の役柄は紅を除いた「紅無」を着用します。

図2 浅黄茶段格子蔦模様唐織 江戸時代18世紀

中年の役柄用の「紅無」の装束です。渋めの色の取り合わせが大人の女性を演出します。





◆ 摺箔 すりはく

摺箔は女役が着付けに用いるもので、織や縫（刺繍）ではなく、型を用いて生地の部分に糊をひいて、その上から金銀の箔を貼り文様を表した装束のことです。通常は唐織などの上着の下に襟元のみがのぞく形で着用されますが、上着の肩を脱いで腰巻姿で上演される場合もあります。羽衣を取られた天女や、般若の面を着用する演目、「葵上」に登場する鬼女に変化する女役（源氏の愛人の六条御息所の怨霊役）での腰巻姿は強い視覚的効果があります。

図4 紅地金鱗模様摺箔 江戸時代 19世紀 備前池田家7代 池田治政所用



◆ 縫箔 むいはく

縫箔は刺繍と金銀の箔で模様を表現した能装束の一種で、織を主とする能装束においてはいささか趣を異にするものです。主に女性役の着付に用いられ、両袖を脱いで腰巻として水衣や長絹などの上着の下に着用されますが、公達や童子などの男役の着付にも用いられます。唐織に次ぐ華やかな装束ですが、織による密度の高い重厚感のある唐織と比べると、撚りのかかかっていない絹糸をゆったりと渡した刺繍の柔らかな軽やかさが際立ち、そこに金銀箔の光沢が加わることで華やかさが増します。

図5 白地籠目に花丸模様縫箔 江戸時代 18世紀

しげおかげんいち のうえ 繫岡鑿一「能画」20枚1組 紙本着色 昭和51年（1976）頃

繫岡鑿一（1895-1988）は、大正11年（1922）に東京美術学校日本画科を卒業後、帝国ホテルのフランクロイドライト建築事務所設計部に勤務し、以後川奈ホテル、赤倉観光ホテルのインテリアやその他美術面を担当し、1960年のホテルオークラ（現在のオークラ東京）建設に際してはホテルオークラ意匠委員会の一員を務めました。

この能画は昭和48年（1973）より在籍していた大倉集古館の主任学芸員時代に、昭和52年（1977）に開催された展覧会に出陳された能装束を能と狂言の役柄に当てはめて描いた、記録としても資料的価値の高い作品です。



【能】 図6 胡蝶



図7 朝長



図8 石橋



【狂言】 図9 嘘吹



図10 抜殻



図11 大黒

よざくら 横山大観「夜桜」6曲1双 紙本着色 昭和4年（1929年）

満開の山桜が篝火によって暗闇の中に浮かび上がる様は幻想的で、あたかも夜桜を背景とした薪能の舞台のようです。本作品は昭和5年（1930）、ローマで開催された日本美術展覧会の出品作です。この展覧会は大倉財閥2代、大倉喜七郎が巨額の資金を出して実現したものです。制作にあたり大観は上野公園の桜を写生し、途中幾度か的大幅な描き直しを経て本作を一気に仕上げたと言われています。日本の美の粋を欧州へ伝えようとした大観の意気込みが感じられる大作です。

図12





#### ◆ 長絹 ちょうけん

長絹は広袖<sup>ひとえ</sup>の単の薄物の装束で、紗や絹の地に金糸や色糸で模様を織り出した優美なものが多くみられます。襟に胸紐<sup>むねひも</sup>があり、袖には露の紐飾りが付いています。主に天女や女神といった舞を舞う女役が上着として用いますが、男役が単狩衣の代わりに、公達の武者姿などの扮装<sup>ふんそう</sup>の時に着用することもあります。

図13 紫地葡萄鳥模様の長絹 江戸時代 19世紀

#### ◆ 舞衣 まいぎぬ

舞衣は女役に限って着用される舞を舞う時の広袖の上着です。長絹と似ていますが脇が縫い閉ざしてあり、胸紐や露はありません。長い腰下の裾部分を腰までくり上げて、内側にたくしこんだ壺折<sup>つぼおり</sup>という着法にします。天女の役などに用いるのが基本のためか、軽やかで華やいだ雰囲気のものが多いです。

図14 紅繁菱地蓮唐草模様の舞衣 江戸時代 18世紀



#### ◆ 狩衣 かりぎぬ

狩衣は元来、公家の狩猟用の外着から普段着に転じたものですが、能では男役<sup>おんやく</sup>の装束としては最も格が高く、貴人の役柄では必ず用いられます。袷<sup>あわせ</sup>と単があり、袷狩衣の多くは金糸で模様が織り出された金襴<sup>きんらん</sup>や錦で、皇帝などの威厳のある役柄や鬼神の役の時に用いられます。これに対し単狩衣は絹地の薄物が主で、公卿などの優雅な男役が着用します。狩衣の着用時には、下に大口の袴が着けられます。

図15 濃萌葱地輪宝模様の袷狩衣 江戸時代 18世紀

#### ◆ 角帽子 すみぼうし

角帽子は僧形の役がかぶる頭巾で、先端部分が三角にとがっており、後ろの布を背中に長く垂らします。後ろに垂らした部分を折り上げて、その折り上げた部分で側頭部を巻き込むようにかぶることを「沙門<sup>しあもん</sup>に着る」と言い、流儀によっては高僧の役に用いたりします。(図16、17は背面から見た状態)

図16 (左側) 花色地宝尽模様緞子角帽子 江戸時代 19世紀

図17 (右側) 萌黄地八藤模様角帽子 江戸時代 19世紀



## 2章 喜怒哀楽の妙—狂言

能舞台において能と能の間で演じられる狂言は、重々しさと優美さを旨とする悲劇である能と対照的に、中世の庶民の日常生活を風刺と滑稽さによって描きだしたセリフが中心の喜劇です。その演技は現実の動作よりも大きく誇張され、笑いを通して人間を描きだします。狂言では面を用いない場合も多いのですが、能と同様に鬼・神・動物・精霊などに扮する際には面をかけます。また、女の役は基本的に面を用いず、素顔のままで演じますが、「乙」という女の面を使うこともあります。乙の面の特徴は低い鼻、しもぶくれの頬にあり、愛嬌や可愛らしさを感じさせます。また、当館所蔵の狂言面は旧久留米藩主の有馬家に旧蔵されたものと伝えられ、大名家伝来の狂言面がまとまって所蔵されている点も貴重です。

### ◆ 素襖 すおう

素襖は室町時代に直垂（ひたたれ）から派生した日本の男性の伝統的的衣服で、武家の常服や礼服として着用されました。直垂と異なり裏地は付いていません。狂言に使用する素襖は、武家で無位無官の者が着用する素襖になった上下共裂（ともぎれ）の装束で、下の袴は長袴となります。



図20 萌黄地寿扇面菊花亀模様直垂  
江戸時代 19世紀



図18 茶地斜縞模様素襖  
江戸～明治時代 19世紀  
国立能楽堂所蔵 【前期展示】



図19 縹地源氏車青海波模様素襖  
江戸時代 19世紀  
国立能楽堂所蔵 【後期展示】

### ◆ 狂言面

狂言では「猿に始まり狐に終わる」と言われるように、幼い役者の初舞台として『うつぼざる 靱猿』の猿役を、修練の総仕上げとして大曲の『つりきつね 釣狐』の狐役を演じるものとされ、「狐」、「猿」の両面は狂言面を象徴するものと言えるでしょう。



図21 狂言面 猿  
江戸時代 18世紀  
猿の面は『靱猿』のほか、猿役の多い『猿さるのこ舞』でも使用されるため、当館では8面が所蔵されています。



図22 狂言面 白蔵主  
江戸時代 18世紀  
『釣狐』の前シテで狐が化けた白蔵主という人物の専用面です。



図23 狂言面 狐  
江戸時代 18世紀  
『釣狐』の後シテである老狐役の専用面です。

## 3章 因州池田家伝来の能面

当館の能面は大部分が因州鳥取藩主の池田家旧蔵であることが知られています。当館の能面は狂言面とともに、明治から昭和にかけて活躍した実業家で、昭和初期に当館の監事を務めた大橋新太郎（1863-1944）により、昭和3年（1928）当館に寄贈されました。因州池田家は能装束の旧蔵者である備前池田家の分家にあたり、同族の大名家に伝来した能面と能装束が、今日当館で所蔵されていることにも不思議な縁を感じます。



図24 能面 増女 江戸時代 18世紀  
増女は天女や女神、楊貴妃といった役に用いられる品の高い面貌をしています。



図25 能面 邯鄲男  
江戸時代 18世紀  
『邯鄲』の主人公、盧生のような若い愁いを帯びた人間の男のほか、若い男の神にも使用します。



図26 能面 大飛出  
江戸時代 18世紀  
雷神など荒々しい神の役に用いられる肌が金泥で彩色され、大きく眼を見開いた男面です。